

プロテスタント貴族とジョン・ノックスによるスコットランド宗教改革運動についての一考察
－1557年～1559年の変遷－ (1)

A study of the Scottish Reformation by the Congregation of the Lords and John Knox
-the change from 1557 through 1559 (1)

伊勢田 奈 緒

1560年7月、スコットランドではエディンバラ条約が締結され、宗教改革戦争が終結し、以後、スコットランドはプロテスタント国家として出発することになった。この一連の働きの核となったのは、5人のスコットランドのプロテスタント貴族達が結集し、1557年に結成した「貴族の会衆」であった。ジョン・ノックスの宗教改革思想を取り入れた宗教改革を共に遂行するために立ち上がった小さな集団であった「貴族の会衆」は、地方レルドと都市商人に基盤を固めていった。まもなく、一般のプロテスタント信奉者である「会衆」と、彼らを先導するプロテスタント貴族たちから成る「会衆指導層」という組織となり、スコットランドにおける宗教改革を促進する点で一体化していく、摂政ギーズのメアリに対抗する一大勢力となっていました。本稿では、宗教改革者ジョン・ノックスがプロテスタント貴族達へ宛てた書簡を考察しながら、1557年から1559年までの「貴族の会衆」とジョン・ノックスの関わりを検討し「貴族の会衆」の意義を考えてみたい。

なお、第一に、当時の時代背景を述べた後、第二に、「貴族の会衆」の結成を述べ、第三に1557年に大陸にいたジョン・ノックスとスコットランドのプロテスタント貴族とで交換され、「貴族の会衆」の発足当時の動きがわかる書簡の翻訳、第四に、「貴族の会衆」による「私的教会¹」の活動の発展、第五に、「貴族の会衆」と摂政ギーズのメアリとの闘争、第六に、ジョン・ノックスの「貴族の会衆」に対する期待、第七に摂政の解任に至る経緯について述べ、最後に「貴族の会衆」の意義について述べたい。(尚、本稿では第一から第三までを執筆し、以降は次号に執筆予定である。)

(1) 時代背景

スコットランドの1557年から1559年は、摂政ギーズのメアリが統治した後半の期間に当たる。メアリは、フランスのギーズ家出身で、1538年スコットランド国王ジェームズ五世と再婚した。1542年ジェームズ五世が亡くなったため、ギーズのメアリの娘で生後6日目のメアリー・スチュアートが、王位を継承した。しかし、メアリが幼少であるため、1543年、メアリに継ぐ王位推定相続人であったジェームズ・ハミルトン²（以下アラン伯とする）が、摂政職に任命された。アラン伯は、

¹ Privy Kirkの訳

² Hamilton, James (C.1516-75) ハミルトン家出身。アラン伯、後にシャーテルロー公となる。メアリに継ぐ王位推定相続人。

ルター派に接近し、熱心なプロテスタント信奉者として見られていた。彼は1543年前半、彼のプロテスタント的政策を実施した。枢機卿で、セント・アンドリュースの大司教であったデイビッド・ビートン³を投獄し、二名の福音主義的説教者が宮廷のチャプレンに任命された。3月の議会では、英語訳聖書を読むことが認められた。しかし、彼はカトリック側から大司教ビートンに対する扱いの責めを受け、またイングランドとの関係がこじれたことでの精神的重圧で、結局、プロテスタント的政策を放棄し、その背教を懲悔したのであった⁴。これはプロテスタント側にも裏切り行為に映った。1548年、女王メアリー・スチュアートがフランス皇太子フランソワと結婚が成立すると、アラン伯の摂政職に敵意を抱いていた、親フランスである皇太后ギーズのメアリは次第に自分の勢力を固めていった。皇太后は、1550年、ブローニュ条約の締結によって、イングランドとフランスとの戦いが終わると、反アラン伯派を結集して、アラン伯を摂政職から除くことを画策した。一方、アラン伯は、フランスに公爵領を得て、シャーテルロー公に叙せられ、ハミルトン家を強化し、皇后に対抗しようとしたが、摂政メアリにはフランス宮廷というギーズ家の後ろ盾があった。このような両者の権力闘争は、異端弾圧の力を緩めることになり、この間、プロテスタント貴族達は宗教改革運動の活動をし易かった。4年間の対立を経て、1554年4月に、アラン伯は摂政職を辞し、議会は、ギーズのメアリを摂政として認めた。メアリは摂政就任後、カトリック貴族を廃し、プロテスタント貴族やレルドに接近し依存した。この貴族達のなかに、ジェイムズ五世の庶子で、摂政メアリの娘、メアリー・スチュアートの兄にあたるジェイムズ・スチュアート⁵や、有力貴族であるグレンケルン伯やオチルトリ卿アンドルー・スチュアートらがいた。また、レルドの中には、プロテスタント信仰を強力に擁護する者もいた。この一時期、すなわち、1554年から1555年秋にかけて、スコットランドでは摂政の宗教的寛容の態度によって、プロテスタント運動がジョン・ノックス等宗教改革者達の指導により民衆の中へ入っていくことになる。しかし、他方、カトリック教会の干渉も始まった。

(2) 「貴族の会衆」の結成

ジョン・ノックスによれば⁶、「貴族の会衆」の結成は1557年10月27日付けのノックスがディエップからスコットランドのプロテスタント貴族達へ宛てた手紙が発端になっている。ノックスの手紙を読んだ貴族達は、今、なにをすべきかを話し合い、その結果、偶像崇拜を押しつけられ、自分達の魂の糧であるキリストの福音の説教を奪われて苦しむより、自分達のプロテスタント信仰の立場を明らかにした方が良いということになった。

³ Beaton, David (C.1494-1546) ジェームズ五世をカトリック信奉に導いた。プロテスタント信奉者の迫害を行い、1546年には宗教改革者ジョージ・ウィシャルトの処刑を行った。その後、直ちにプロテスタント信奉者に暗殺される。この事件を機にジョン・ノックスたちプロテスタント信仰者たちは宗教改革運動を展開することになる。

⁴ Brown, P.H., History of Scotland, vol.II (Cambridge, 1911) p.7

⁵ Stewart, James (C.1531-70) 1561年から1565年メアリー・スチュアートの枢密顧問官で、1562年にMoray伯の名を授かる。1567年以降彼が暗殺されるまで、ジェームズ6世の摂政であった。

⁶ John Knox, John Knox's History of the Reformation in Scotland, ed. William Croft Dickinson, vol.1 (Edinburgh, 1949) p.136

1557年12月3日に、「コモン・バンド」という文書⁷をプロテスタント貴族達は作成した。署名者は、アルガイル伯⁸、グレンケルン伯⁹、モートン伯¹⁰、ロルン卿¹¹、ダンのエルスキ¹²が名を連ねている。彼らは、この文書によって初めて、自分達の立場、方針を公にしたのであり、全員がこれ以後、スコットランドにおける宗教改革運動をプロテスタント聖職者とともに、促進することに尽力し続けた。また、彼らは同年10月27日付けのノックスの彼らへの勧告の手紙に賛同したことがわかる¹³。

尚、署名者達は、この文書の中で自分達を「貴族の会衆」¹⁴と呼んでいる。彼らは自分達の「力と財力と肉体をもって」「恵みに満ちた御言葉と主の会衆を維持し、助け、確立すること」を、また、「牧師が純粹に、真実に、キリストの福音とサクラメントを神の民にとりなす」ことができるよう、牧師を支え、守ること、そして「迷信、醜行、偶像崇拜をもったサタンの集まり」のカトリシズムを拒絶することを、そして、「たとえ、死を賭けても」自分達は「神の勝利を確信し、主のために戦う」ことを「神の御前で」「敵を明らかに示して」約束したのであった。

「貴族の会衆」は、発足当初は小さなひとつの信仰共同体にすぎなかった。しかし、この小グループがやがて、スコットランドの宗教改革運動を担っていく指導層となっていくのであり、「貴族の会衆」の結成は画期的な出来事であった。1557年12月17日付けの手紙において、ノックスはプロテスタント貴族達に彼らの計画が実現するように励まし、同時に、彼らが信仰の為に迫害されないように望んでいる。さらに「権威が同意すると否とに関わらず、キリストの福音があなた方に、あなたがたの兄弟たちに、臣民達に、真に説かれ、その聖礼典が正しく執行するように」¹⁵準備するよう説いた。また彼は、抵抗権の問題について論じている。ノックスによれば、支配者あるいは皇帝に対する武装蜂起は合法的な手段であるばかりでなく、迫害や暴政から臣民たちを守る義務なのであるとしている。以上のことから、明らかにノックスはスコットランドにおける宗教改革遂行を「貴族の会衆」たちの働きに大いに期待していたのである。

⁷ Ibid., p.136

⁸ Archibald Campbell, forth earl of Argyll

⁹ Alexander Cunningham, fifth earl of Glencairn

¹⁰ James Douglas, forth earl of Morton (C.1516-1581) 彼は1572年から1578年まで摂政として活躍したが、1581年ダルンリ卿殺害に加担したとして処刑された。

¹¹ Archibald Campbell, Lord Lorne (後、fifth earl of Argyll) (C.1538-1573)

¹² John Erskine of Dun (C.1508-1591) 1561年に聖職授任し、伝道者として活躍した。

¹³ 手紙の中で、ノックスは貴族達に向けて、彼らの「職務と義務」は「全力をつくしてすべての暴力と圧迫からあなたの方の臣民と兄弟達を擁護し、救う」ことで、それは「神の命令に基づいて」いることであるから、「ひとりひとりがこの問題を熟考」するように勧めている。

¹⁴ Ibid.,p.136

¹⁵ John Knox, On Rebellion, ed. Roger A. Mason, (Cambridhe, 1994), p.147

（3）1557年に大陸にいたジョン・ノックスとスコットランドのプロテスタント貴族とで交換され、「貴族の会衆」の発足当時の動きがわかる書簡の翻訳

Knox and the Protestant nobility, March--- December 1557

ノックスとプロテスタント貴族との書簡 1557年3月—12月

1555年から1556年にかけての冬、スコットランド伝道に成功した後、ノックスはジュネーヴに戻り、そこから本国のプロテスタント貴族達と書簡を交換しながら彼らと連絡を取っていた。次の書簡は、ジョン・ノックスによる『歴史』からのものである (Laing, MS, fos. 90v-94r; Laing, vol. pp.267-74; Dickinson, Vol. pp.131-7)。1557年3月付けのものはプロテスタント貴族から、ノックスをスコットランドへ招聘を依頼する手紙であり、次はそれに対するノックスの返答である。これらの書簡は、本国において刻々と変わる情勢の中にいるプロテスタント貴族達の緊迫した心境と亡命中のノックスの不安とあせりの心中が手に取るようにわかる非常に重要な史料であると考えられる。また、最後のものは、1557年12月3日に署名された「第一契約」についてである。

① 1557年3月10日付けのプロテスタント貴族からノックスへの書簡

救いのために恵みと憐れみと平和を

主に非常に愛され、あなた¹⁶が良く知っているこちら側¹⁷にいる信仰者たちは（神に感謝）、あなたが彼らに残してくださった信仰を確かなものとしつつ、毎日、あなたが再び来られることを信仰心をもって渴望し、望んでいます。そして、もしも神の御心により、神があなたに時を与えてくださるなら、私達は、あなたが再び、こちらに戻ってきてくださることを心から、主の名において、望んでおります。ここでは、神が時を赦してくださるなら、あなたはあなたの教えを喜んで聞き入れ、そしてさらに神の栄光を推進しようとして、生命と財産をかけるつもりである、あなたが残していったすべての信仰者達を発見すると思います。この国の行政官達は身分はあなたがおられた時と同じ身分ではありますが、しかし、以前行なっていたような残酷な行為はもはやありません。それどころか、むしろ、私達は神が望まれているように神の群れを増やすことができそうなのです。というのは、私達は皇太后陛下と王国の残りの貴族達も、キリストの福音の敵である托鉢修道士たちに尊敬を払わなくなっているように思われるからです。数語で言えば、これは信仰心のある者と信仰のない者とがいるということです。この私たち信仰を担っている者は、私たちの心の平安をあなたに詳しく示したいのです。それでは、主にあって、どうか、このことが、叶いますように。

スターリンにて。1557年3月10日。(Glencairn, Lorne, Erskine, James Stewart) 署名。

¹⁶ ジョン・ノックスを指す。

¹⁷ スコットランドを指す。

② 1557年10月27日付けのノックスからプロテスタント貴族への書簡

上記の書簡は、すぐにバロンであるジェームズの手を経て、ジュネーヴに住んでいるノックスに同年5月中に手渡された。彼は、受け取り、スコットランドへ招聘依頼の手紙について、彼自身が牧会しているジュネーヴの教会の人々に、また、ジョン・カルヴァンや他の敬虔な牧師たちにも相談した。彼らはみな一致して、その招聘を断わることはできないと主張した。故に彼は迅速に彼らにスコットランドに訪問する約束の書簡を送った。それからすぐに、彼はスコットランドへ行く準備をした。9月の終りには彼はジュネーヴからスコットランドへ行くためにディエップへ着いた。そこで、彼は以前受け取った手紙とは反対の内容の手紙を受け取ったのであった。以下の書簡によつて、そのことを理解することができる。

知恵と忠実と強い心が、われらの父である神の御好意によって、また、主イエス・キリストの恵みによって、あなたがたに増し加えられますように。

貴族達よ、私が約束したことに従つて、十分決心をして、神の御心により、あなた方を訪問するための最初の船に乗るために、私は10月24日にディエップに着きました。しかし、不愉快な二通の手紙をそこで受け取ったために、私は一時、留まることを強いられました。その一つの手紙は、信仰心のある兄弟から私に宛てられたものであり、それにはこのことを企てる前に最終的結論を出す新たな討論がなされ、それが決定するまでにこちら側で留まっていてほしいということが述べられていました。そしてもう一つの方は、ある紳士から友人の一人へ宛てられたもので、このことについてその人は、しっかりとした、また、熱烈と思われる者達すべてと通じあってきたのですが、だれもそのような計画に必要な大胆さも忠実さも、見られなくなつたことを私に知らせてきました。そして、ある者は今まで、そのようなことに取り組んできたことを後悔したり、ある者は多少恥じたり、そして、他の者たちは、もしも、それについて試されたり、問われたりするなら、そのような目的に今まで同意していたことを否定することさえすることさうというのです。

私はこれらの2通の手紙に考えあぐね、困惑し、怒りと悲しみが突き抜けました。私は、このことで、非常に労苦し、うろたえました。私は、今回ることは、今日、ヨーロッパで生活している敬虔で、学識のある人々に動かされ、私がそのことを判断し、真剣に考えた結果でした。というのは、すべての企てにおいて、私の良心のみならず、あなたがたの良心を信じていましたから。ですから、このようにじっくり考慮をしても何もうまくいかないということは、あなたがたにも、私にも恥となって跳ね返ってこざるをえないことであるのです。というのは、私を必要としたことが必要でなくなったこと、あるいは、私の推進者達が最初の召命について機が熟していないと判断することに非常にむなしさを感じるのです。ある者にとっては、私の公的職務のみならず、特別な責任を投げ捨て、いわば、放棄し、そして、私の家や家族の長を欠いたまま、（神よ、救ってください）そして、私を何度も牧師の一人に任命してきた小さな（しかし、キリストに愛されている）群れのことを他の人にゆだねてきたことは、小さく、大した事ではないようにみえるかもしれません。このことは世間の人にはちっぽけなことかもしれません、私には小さなことではないのです。非常に多

くのまじめな人たちが、私が最後に彼らに「おやすみ」を言うや、すぐに私のために泣いた彼らのあの目を私は見なくてもよかったです。私が帰ることを神に望み求めたのであれば、「私が決意した旅の障害はなにか」という私の質問に、私に分かるように答えてください。

私の悲しみの原因は（神は証人であります）、私を肉体的に満足させること、あるいは世俗的に不満に関わるものではありません。それは、神の福音の自由によって神の力が、あなたがたを束縛から救う以外には、あなた方ばかりでなく、まじめな王国や島のあらゆる住民達を確かに見ている神による過酷な災いや罰に関わるものなのです。私が言っているのは、悪魔や、キリスト・イエスや神の真理を否定する者達のために用意された永遠に燃え盛る火や拷問により、邪悪な息子たちを地獄（もっとも恐るべき所ですが）へ従わせるばかりでなく、隸属やまじめさが（私の良心に誓って、私は貴族の名を持っていない者を除外していますが）、あなたがたが裏切ってきた、あなた方自身の身体やあなたがたの子供たちや臣民や子孫をとらえ、また、まもなく、彼らとあなたがたの王国と戦って裏切り、見知らぬ者達の奴隸とするということです。始められた戦争は、（私はそれが神の御業であることを知っているのですが）もしも、まもなく、救済策を講じられなければ、あなたがたの破壊を招くことでしょう。神が、あなたがたの目を開けて、あなた方自身のみじめな身分を認め考慮してくださいますように。

私の話している言葉はなにか激しくて、慎重さを欠いているように思われるでしょうが、しかし、隣人愛が全ての物を最善に解釈するはずであるように、賢明な人は、特に、肉においても精神においても救いの問題に関わる事については、真の友は、お世辞づかいであるはずがないことを理解するはずですし、しかも、それは一人、二人の問題ではなく、王国全体の（救いの）問題なのですからなおさらです。私が混乱してむせび泣いたのはなぜか、また、なぜ、感情的であったのかを神は、いつか明らかにしてくれるであります。しかし、私は以前の非常なる厳格さにこのことを加えたいのです。すなわち、危険が伴っているという理由で、だれかがあなた方の以前の目的に対して、あなた方を気弱にさせているのなら、その人は決して、賢明でも、友好的でもなく、愚かで、あなた方に対して道徳的に敵として判断されるものです。愚かであると言いましたが、その人は神の示される賢明さを理解できないのです。そして、あなたの敵であると言いましたのは、その人は、神の恩恵からあなたがたを離そうと骨をおり、あなたがたに反対して、神の復讐と過酷な災いを引き起こしたからです。また、その人は、あなた方が、神の賛美や栄光より世俗的な平安を好み、あなた方兄弟の救いよりも、邪悪な者たちとの友情を好むべきだと望んだからです。

私は、恐ろしく困難なことがあなた方の企てに続いておこるであろうことを気づかないわけはありません。（私が前の手紙であなたがたに述べましたように）。しかし、これらの困難や逆境が神の御言葉によって表された神の御心の達成のために維持したものであれば、喜ばしいことであり、心地よいものなります。というのは、困難や逆境が実在の人の判断に表れることはとても恐るべき事であります、しかし、それらは、苦しんでいる人々を決して滅ぼすことはできませんし、全く消滅させることもできないからです。なぜなら、目に見えず、無敵の神の力は、神の約束に従って、簡単に神に服従するようなものすべてを維持し、保持したからです。何年もファラオはひどく

残酷なことをしてきましたが、そのファラオの悪巧みは、イスラエルの男の子らを滅ぼすことはできませんでした。また、紅海の水とさらに、ファラオの怒りもモーセや彼に導かれてきた人々をくじくことはできませんでした。なぜなら、一つには、彼らの子孫を増やすという神の約束があったからであり、他方、そのような危険に入るようという神の命令があったからです。あなた方が賢明なら、私達の神が人に留まり、そして不変であることを考慮すべきだと思います。そして、キリスト・イエスの教会は、イスラエルが子孫を増やす約束を保持し守りぬいたことと同様の約束を考えるべきなのです。また、さらに、モーセがファラオの前に行かなければならなかつたのと同様に、あなた方は以前の企てを実行することを考慮すべきなのです。というのは、あなた方臣民たち、さらにあなた方の兄弟達は肉体と魂を束縛され、圧迫されているからです。そして、神は、（もし、あなた方が目に見えないこの世界のことで、死んでいるのでなければですが）彼らを救うために、（たとえ、国王達や皇帝たちに反抗することになろうとも）あなた方自身の命を賭ける様に、あなた方の良心に向かって語りかけておられるのです。

なぜなら、その理由のためにのみ、あなた方は国民の統治者と呼ばれているのであり、あなた方は神の命令に基づいて、あなた方の兄弟達から、名誉、税金、臣従を受けているからです。そのことは、（大部分の人々が誤って想像しているように）あなた方の生まれや子孫とのつながりという理由によるのではなく、その理由は、全力を尽くして、すべての暴力と圧迫からあなた方の臣民達と兄弟達を擁護し、救うという、あなた方の職務と義務によるものなのです。私が全貴族に向けて宛てたこの手紙の主眼点を念入りに熟考すること、そして、ひとりひとりがこの問題に専念するよう願います。というのは、いつか、宗教の改革や公的な残虐非道な行為の改革が、聖職者達よりも、あるいは、国王と呼ばれる主要な統治者達よりも、あなた方に関わっていることをあなた方の良心が認めざるを得なくなるでしょうから。

主イエスの全靈の支配によって、あなたがたの思いが神の栄光とあなた方の永遠とあなた方の兄弟の慰めに導かれますように。アーメン。

1557年10月27日ディエップから。

③ 1557年12月3日付けの「コモン・バンド」（『第一契約』）という文書

貴族と特に数名のジェントルマンに向けられた他のものと一緒にダンやピッタロウのレルドたちに向けられたものとして、上記の書簡（1557年10月27日付けの書簡）を読んだ後、彼らは今、何をするのが一番なのかを新たに話し合った。そして、彼らはこれから一度決意した目標に向かい、自分たちのプロテスタント信仰の立場を明らかにして、神に委ねた方が良いという結論を出したのであった。そのことの誓いとして、コモン・バンドが結成され、署名されたことが以下の文書でわかる。

私達は、今の時代の反キリスト者達であるサタンどもがキリストの福音とその会衆をひっくり返し、滅ぼそうと非常に怒り猛っているかを理解しているが、私達の逃れられない務めによって、た

とえ死によってさえも、私達は神の勝利を確信して主のために、戦うべきであります。私達は神とその会衆の前で、十分考慮されるべき私達の義務を約束したいのであり、(神の恵みによって)、私達は、あらゆる力を尽くして、持続的に神の非常に聖なる御言葉とその会衆を維持し、促進し、確立するために、私達のすべての力と財産とさらに私達の肉体をも用いることを約束したいのであります。そしてまた、忠実な牧師が純粹に、真実に、キリストの福音とサクラメントを神の民に執りなすように、可能な限り勤めるように約束したいのであります。私達はサタンに反抗し、また、前述の会衆に対して、暴政やトラブルを意図する全ての邪悪な権力に抗し、私達の生命を犠牲にして、全力でキリストの全会衆とその各メンバーとを維持し、養い、擁護したいのであります。上述の聖なる御言葉と会衆とに、私達は自らを結びつけて、さらに、あらゆる迷信、醜行、偶像崇拜をかかるサタンの集いを厳に放棄し、否認致します。ここに、神の御前でこの私達の忠実な約束によって、私たち自身、敵を明らかにし、それを私達が証明することによって、会衆の皆に告白するのであります。

エディンバラにて、1557年12月3日。

神を証人とする。

署名者

アルガイル伯 (第4代) Archibald Campbell, fourth earl of Argyll

グレンケルン伯 Alexander Cunningham, fifth earl of Glencairn

モルトン伯 James Douglas, fourth earl of Morton

ロルン卿 (後の第五代アルガイル伯) Archibald Campbell, Lord Lorne (Later fifth earl of Argyll)

ダンのエルスキン John Erskine of Dun

Knox to the Protestant nobility, 17 December 1557

④ 1557年12月17日付けのノックスからプロテスタント貴族への書簡

ノックスは1558年の春にジュネーヴへ戻るまでの数ヶ月間、ディエップに留まっていた。彼は恐らく、「第一契約」が起草されたことを知らなかったであろう。彼は、次の書簡をその二週間後の1557年12月17日に書いている (Laing, vol.iv, pp.276-86)。

スコットランドにおいて真理を告白した貴族とその他の人々へ

主の秘義は神を恐れるもの達に顯される。

ダビデとソロモンの口によって (高貴な貴族諸君よ)、聖霊は、「全ての知恵の初めは、主を恐れること」として2つの理由を述べています。第一に、なぜなら、そのことなし¹⁸で、賢明であると

¹⁸ 主を恐れることをしないこと。

思われる全ての者は滅び、また、賢明であると判断され、また、自分自身賢明だと思っている者たちは共通に破滅しているのであります。というのは、本来の賢明さは、神の恐れによって支配されたり、抑制されるものではなく、それは極端に愚かなものであると同様に、致命的な一つの毒であり、悪意なのであって、それで、結局は、すべての時代の経験が私たちに伝えるように、世俗的な賢明さは、世俗的な混乱をもたらしてきたのであります。逆に、主を恐れることによって、世界が始まる前でさえも、最大の窮地におかれた神の僕たちは守られました。しかし、これは、主を恐れることが前述の名称をもつ主要な理由ではありません。というのは、世俗的に賢明であるもの達は、一度、死に、混乱することは明らかであるばかりでなく、ダビデが証言しているように、無知な者や狂氣で激怒する者たちと共に、全ての者は一度死ぬことが、定められているからであります。しかし、なぜなら、主を恐れことによって心は、深く融合され、また、そこで、聖霊の恵みがしばしば、すべての敬虔なる神の選ばれた子へのさらなる導きと慰めと確かさを増し加えられるからです。だから、それは、「知恵の初め」と呼ばれるのにふさわしく、重要なのであって、そのことによって、人は至福に達し、また、故に死と混乱とを免れないのであります。このことは、絶対的に確かである聖霊による結果であります。そこでは、大いなる恵みと無限の善を持つ神は一度、神の真の恐れを持って、その心に触れ始められるのであり、そして、言わば自然の反抗から、変化して、聖なる神への心からの崇敬に変わるのであります。そして、そこで、神は（地獄の門での権力や猛威に反撃してでさえも）、神ご自身の栄光を顧し、また、神が聖霊の教師や導き手を任命することを限りなく喜び、そして我々を贖ってくださるのであります。

そして、たとえ、この神の好意と父親らしい配慮が永遠の生命について、すべての神の子に共通であったとしても、（神の知恵としてのそのような神の恵みを部分的に受け取っている者、各々は、神の始められたよき業が終わり、確認するために適切である、その手段を知っているのですが）しかし、一時的な恩恵を分配する際に、神は、神が統治者や他の者たちを慰める者たちや維持する者たちと決め任命した者たちに特別な配慮をするのであります。ヨセフに対して、神は彼が奴隸の身分の時代においては、未知なる者の目に、好意を与えたばかりでなく、彼の若い時代にも、神は著しい幻を彼に示され、しかし、後年には彼の父も彼自身も、完全な理解と知識には、十分に到達はしませんでした。同様に、神はソロモンに対して、多すぎるほどの富と栄誉とこの世の平安を与えられ、そのうえ、彼が必要とした知恵を与えられました。また、特に、その時代の死すべき人々であるダニエルに対して、知識と秘義の啓示が示されました。しかし、神は来るべき事柄を隠されました。希なる特権は（その特権において、彼らが彼らの兄弟達よりもずっと優れていたのですが）、他の者に役立ったり、有益であったりするほど自分自身には、役立たなかったであり、神は彼らを導き手、統治者、防衛者、執事にしたのでした。というのは、ヨセフに与えられた夢や幻の解釈は、彼の永遠の救いに役立つよりはむしろ、エジプトのコモンウェルスに役立ったのであり、また、ソロモンやダニエルに与えられた特権についても同様なことが言えるかもしれません。一方はその至福によって、彼の生きた時代のイスラエルの民が評価されたり、他方、その啓示によって、過去の事柄と来るべき事柄に達成されるべき目標が、今日の神の全教会に示されたのです。故に、ほん

の少しの者に与えられたそのような非常に希な特権や恵みにより、多くの者が慰められ導かれ、守られるのであります。

しかし、ここに特徴付けられ、また、熱心に守られたことは一つのことであります。すなわち、これらすべての非常に優れた恵みを前にして、私たちははっきりと神の恐れが彼らの心の中に植え付けられていることに気づかせられるのであります。というのは、ヨセフにおいては、私たちは、彼の兄弟が犯した罪や不正の憎しみを、父に明らかにできるのですが、その権威によって、彼は十分判断して、それを抑制しました。ソロモンの場合、私たちが理解していることは、知恵を望み、それによって、彼が彼に委ねられた人々を公平と正義とをもって支配統治したのでした。また、ダニエルの場合、彼は彼の神の法により禁じられている肉を食べて汚すことを明らかに恐れたと思われます。これらのことから、主を恐れることは、知恵の始まりであり、また、持続なのであると思うのであります。知恵について、知恵と言う名前に価値があるのであって、また、神が恵みを与えて、その者に著しい働きをするよう定めた者たちに与えられた神の最も希な贈り物なのであると思うのです。しかし、さらに、私はこれらの希な特権をもっている者やあるいは、秘義を明かされた者だけが神に示されたら直ちに、彼らの心の中で、神に真に恐れを抱くということを意味するのではなく、また、そのほかの者が何も感じないという意味でもないことを言っておかなければなりません。しかし、また、神は彼らの心を和らげ、感動させ、また、崇敬を持って、彼らは神の使者たちによって、勧告や助言を与えられるのであって、そして、たとえ、彼らがその力や手段を動かしにくいように思われたとしても、彼らは彼らに示された神の御心に従うことを決意するという意味なのであります。これらの者達は、彼らが神について無知であるように思われますが、神を真に恐れることを全く欠いたとは判断できませんし、神が彼らを必要として、果たすべき知恵や力を欠いていたとも言えないと思うのです。

というのは、ファラオが理解できない事柄に恐れているとき、ヨセフは人が思っても、恐れてもいなかった危険に備えることを勧告し助言しました。そうすることで、彼は神の使者として大いに評され、そのようなことが神の靈と力と摂理によって、啓示されるだけではなく、成され、もたらされたのでした。私が申し上げるこうしたことは、（神の使者達を崇めること、彼らが示した教えや義務に心から信奉し、従うようにすること、また、神を贊美することを学ぶこと、そして、神の摂理や驚くべき御業を人々に知らすこと）は、神を真に恐れる信仰以外に本当に誰も心からできないのであります。同様なことは、最高の頭であり、彼の時代における地上のたった一人の君主であるネブカドネツァルに示されることであります。彼はダニエルの前で（彼自身の夢の解釈を聞いて）、ひれ伏すことを恥じず、そして、イスラエルの神以外に天と地とを支配する神はいないことを公に告白しました。そして、さらに、異邦人で、捕らわれ人であるダニエルを彼の王国の最高位につけただけでなく、彼の要求に応じて、王はダニエルの同僚に名誉と職務を与え、また、その当時、王の主権に苦しんでいたユダヤ人の残りの者も優遇しました。その信仰告白や服従や愛することや自由であることは、疑いもなく、彼の心に植え付けられた秘義や隠された神を恐れることから生じたのであり、また、疑いもなく、彼が神について無知であり、神の民の最大の敵であったよう

に思えるときにいくらか根ざしたものであったのです。

聖霊は、さらなる恵みと価値あるものとが、（これらのことばかりでなく、多くのほかのものに對しても）この彼らの服従を確かなものとすることを隠しはしないのであります。というのは、そのひとつのことによって、すなわち、ファラオによって、飢饉の時代、彼の民は、食べることが出来、守られただけでなく、彼の王国においてなされた敬虔なる備えによって、多くの他の者達の命をも守られたからであります。その命とは、当時、地上に存在したとされる神の全体の教会の命であり、ヤコブやその家族について言っているのであります。そして、たとえ、ネブカドネツァルが堕落して、多くの事柄において、残酷な罪を犯したとしても、しかし、私たちは、神の慈悲によって悪を克服するのであって、彼はずっと続く罰と全ての敬意から見放された後、再び、彼は人としての振る舞いや分別や理解を（しばらく、彼はそれらを奪われていたのであります）、回復するばかりでなく、彼のかつての威厳や栄誉や支配も回復し、また、神の栄光の啓示やまれな博識や他の人への勧告やなぐさめをも回復したのであります。というのは、博識や教義が、彼が信仰告白を公表することや、彼に神の偉大なる御業があらわされたことを公にすることによって、世の人に、偶像崇拜に（これまで）おぼれ、生ける神についての完璧なことを知らずに生きてきた、多くの国や国民にそのことを通知することになるからであります。そして、その勧告は今日、地上の統治者や指導者達に彼が罰することによって、受け取るかもしれない、また、受け取るべきものなのであります。また、その希なる慰めは、彼の大いなる著しい栄誉の回復に際して、罪を悔い改める者に、残されるのであります。そのことを私は、人の機知やあるいは、才能によって言うことはできないのであります。

ですから、神を恐れることが心に植え付けられるところはどこにでも、あとで受け取る者ばかりでなく、その他の者達にも、知恵やそのほか必要で役に立つ恵みが増し加えられるということを何度も言いたいのです。しかし、この徳や知恵の心の根（神を真に恐れる心を言っているのですが）が不在で、神を受け入れることをせず神に服従しないのなら、神の使者への限りない愛はなく、同様に、神を恐れることゆえに求める知恵でなければ、神の御心によって啓示される大いなる恵みもないであります。しかし、むしろ、改革のために示された慎重な助言や勧告は、明らかに不正のものとなり、また、王国やコモンウェルスの一時的な便宜や維持のために与えられたものなら、注目されず、また、全く理解されもしないであります。さもなければ、神の使者が明らかに支配者や指導者達に言ったとき、彼らの助言や勧告は軽蔑されるのであります。もしも、多くの疫病の後、高慢なファラオがモーセの助言に従っていたら、彼自身は救われたであります。しかし、その覆っているものの前に太陽は輝き続け、そして、結局、一切の光も知恵もなしに、ファラオとその軍は非常に激怒しながら、紅海の水の中におぼれてしまったのでした。

エレミヤのゼデキヤ王への勧告と助言は（それは激しいものに思われたけれども、というのは、王が彼を苦しめているその権力に対して仕え、また、服従することを命じたからであります）、しかし、もしも、王がその預言者の命令に従っていたら、彼にもまた、そのコモンウェルスにも少な

からず利益があったでありますように。しかし、結局のところ、王とその議会は彼らの心に従い、そうして、神と神の使者であるエレミヤに対して反抗することに同意したので、一方も他方も、つまり、王とその議員達であります、預言者の口によってしばしば公言された、神の復讐という苦い杯を味わったのでした。なぜなら、ゼデキヤの目は彼の議員達やそれどころか、彼の息子達が彼の面前で、殺されるのを見ることを強いられたのであり、そして、すぐに、彼の目はつぶされたからです。それで、その後、彼は地上において決して光も慰めも見なかったのであります。エルサレムは火で焼かれ、全地は荒れ果て、また、この一切の災難は彼らの上に起こりました。なぜなら、神の預言者たちによって宣言されていた神の助言をあざわらい、侮辱したからであります。しかし、この惨めで普遍的な天罰に際して、神を恐れる者、そして従う者には、慈悲が示されるのであり、神の預言者にも慈悲は示されるのであります。エレミヤの命令で、バビロンの王に従い、そして、その時の復讐から救われた大衆のほか、ムーア人でエチオピアのエベド・メレクの王への仲裁とかざらない要求によって、その預言者は死と牢獄から、救い出されました。また、書記であるバラクは、王や議員達にエレミヤの説教を書いて提出しました。これら二人に対しては、神の復讐の火により多くが焼き尽くされた只中にあっても、神の好意と恵みが見出され、餌食となるべき彼らの命を得たのでした。

貴族諸君、私が短く触れたこれらのこととは、あなたがたを導くためというよりもむしろ、一度決心した敬虔なる仕事をすることにあなたがたを活気付け、励ますためなのです。あなたがたは、（そして、私への希望がまだ留まっているようにということですが、）キリスト・イエスの事で、そして、このバビロンと反キリストの束縛からあなたがたの兄弟達を救うことに対して、あなた方の生命とあなたがたの名誉とそして、あなたがたが、神の御手の中の世俗的な事柄において受け取る一切のものに、危険を感じています。あなたがたが私と連絡し合い、そして、私は主イエスの御前で答えなければならないように、私は、あなたがたに聖霊の助言によって私が確かなものとなったことを示した、この件は、その事で、肉体や血がいかなる判断をしたとしても、神の栄光を顯すためであり、あなた方の永遠の慰めのためなのです。すなわち、私の前の手紙で十分言ったように。しかし、このあなたがたのかつての目的や私の助言にもかかわらず、もしも、神を真に恐れる根があなた方の心に何もないのであれば、全ては無駄で、徒労となります。というのは、この一つのことについて、あなた方は疑いもなく、確信すると思います。すなわち、洪水がおこり、大風が吹き、大嵐がおこり、それらは共に猛威となって、あなた方の要塞を襲撃するからです。そして、それから、あなた方が、自分を捨てて、神に従うように命じられた、キリスト・イエスという確かな岩に基づかない限り、あなたがたが、あなたがたの敬虔なる目的において、忠実でい続けることは不可能であって、たちまち、あなたがたの建物や家は、打ち壊されることでしょう。というのは、肉や血は、自己を否定することはできないし、また、罪を自覚すること以外は、火の苦しみに耐え、また、留まることもできないであって、だから、他の力によって、強められ確かなものにさせられるのであります。この秩序は、神を神の一番と是認された兵士達と戦うために任命し、送ることを抑制させるのです。初めに、彼らの持っていた、彼等自身の中や力の中に持っていた、全ての自信

を失うことであり、その後、神の大胆な強さの中で、彼らは勇気付けられ、立ち上がることであり、そして、神の慈悲の自由な約束によって神は彼らのプライドの問題から、救うのであります。そして、この落胆、屈辱、彼等のプライドの拒否によって、神は世俗の権力の良心とプライドに働くのであって、そして、神は、彼等自身の心の目を開けて、彼らが彼等自身の本性の慘めさと彼らの罪に値する非難を見せ、そして、神はその良心を抱きしめ、打ち負かすのです。深い熟考があって、神は彼らに、いわば、地獄の場所、彼等自身の心からの憎悪のところ、そして、罪の場所に連れて行くのであり、しかし、この所で、神は彼らを残すではなく、彼らに、神のただ一人の御子である、キリスト・イエスにおける神から彼らに受けるに値しない愛と好意を示し、神は、彼らの良心を救い出し、勇気付け、その結果、すべての攻撃の中で、彼らは神の自由な慈悲に頼るのであります。こうして、神はペトロのプライドを打ち負かしたり、また彼自身の強さにあるプライドも圧倒したのでした。それから、また、パウロが律法の義に抱いていた栄光を打ち倒したのでありました。神は、一方を、ユダヤ人の説教者として、他方を、異邦人の主なる使徒として任命したのです。そして、神が喜んで、この世の惨禍によって圧迫されている神の民を救うために任命したそのような者達に、神はしばらく彼らに懇願しましたが、結局、彼らはいかなる肉に関わるものについても、誇りにすることはなくなったのであります。というのは、モーセはファラオの家で若い頃、養われていましたが、しかし、彼は苦しめられているイスラエル人を救うために神の使者として任命された人である事が知られています。しかし、その前は、彼は四十年間追放され、その上、彼の義父の羊を飼っていましたがそのことを恥じていませんでした。ギデオンの低く卑しい身分やダビデの軽蔑されるべき若い頃のことは、私たちを導くために聖霊によって、隠されることはないのです。先ず、神の使者として任命される際、神の目は、世の中が最も評価するようなことを見ないのであります。そして、第二に、すべての肉の傲慢さやプライドを打ち負かし、神は卑しい身分から選んで（ダビデが言っているように）、その人を神の民の支配者達と共に、すべての価値も功績もなく、しかし、二人とも彼らの創始者として、おくのであって、彼を用いて、だれも栄誉だと思わないことをなすのであります。

同様なことを例をあげてもっと証明してもよいのですが、しかし、信書のため量をかさばらないように、これらの歴史をもう、利用しないことにします。こうして、神について教えられ、明らかに、彼らの弱く、貧弱な性質が見えることによって、偽りなく、神の力を信じ、神の自由で受けけるに値しない憐れみに頼るようになった者たちは、時々、神の聖霊が増し加えられ、知恵が豊富となり、忠誠心も加わって、全ての苦悩の只中にあって、神の名の下、彼らが始める良き業を果たすために仕えるのであります。そして、神は、ときどき、慘めであり、また尊敬もされないと思われてきた者によってさえも、非常に力強く働いて、その者によって、神は多くの者たちを励まし、守り、救ってきたのであります。もし、あなたがたが（貴族諸君よ）、この精神を味わうなら、そして、同様な意向で、あなた方の手を主の御業のために置いたならば、その時、いかなる生命あるものが、あなた方の逆のことを思おうとも、あなた方は栄えるのであって、最後にはあなたがたは主に祝福される者と呼ばれることあります。というのは、神の栄光を抑圧することに精を出す者が彼

らの名前を次の子孫へ呪われた者として残すのに対して、心から神の栄光を推進しようとする者達は、彼等の名前を、命の書に書かれるだけでなく、ここに保たれ、特別な推奨をもって、記録されることであります。しかし、多くの事柄の中で、私はあなた方の企てにおける神の栄光を表すためにあなた方の務めとあなた方の兄弟を救うことだけにあなた方の目をひたむきに見続けてもらいたいのであります。

さて、私は目下、あなた方をさらに悩ますのではなく、こちらで騒がれているうわさを私が、不確かですが聞いていることだけをただ公表したいのです。それは、あの王国では、ある人々によって、権威に対して反目と反抗がなされているということです。その点で、私の良心は、あなた方が、私が神の恐れの中にあって、また、神の真理の確かさによって、あなた方と意志を通じ合わせるべく、私の助言やそれに私の判断や戒めを制することを容赦しないであります。そのことは、キリストの栄光を促進しようとするあなた方の誰もが、突然に、合法的な事柄において、既成の権威に不服従の態度を示すべきではないのであって、また、自己の特別な目的のためや世俗的な栄達のために権威に対して乱そうとするような者達を援助したり、強化したりすべきではないであります。しかし、キリスト・イエスが情けをかけられる中で、私は率直さと合法的な服従を持って、神の大胆さとあなた方の信仰告白を合わせて、あなたがたが権威に対して好意を求めるように勧めるのであって、それによって、(もし可能ならば)、あなた方が労苦して目的が促進し、少なくとも、迫害されることがないことを願うのであります。このことで、もしも結局、つましい要求が達することができない時には、神に反対はせず、一切のことにおいて、あなた方が権威に従順だったことについて、公に重々しく異議申し立てをすることをあなた方は合法的にその窮地に試みてよいのであります。そのことは準備すべきであって、権威が同意すると否とに関わらず、キリストの福音があなた方に、あなた方の兄弟たちに、あの国の臣民達に、真に説かれ、その聖礼典が正しく執行されるように備えてよいのであります。

そして、さらに、たとえ、君主たちや皇帝達に抗することになっても、力の限り、迫害と暴政からあなた方の兄弟達を守ることは、合法的なことであり、そればかりか、義務でもありますし、私が前にも述べたように、あなた方自身が合法的な服従を否定はせずに、そして、権威や世俗的に秀でることを求めたり、その上、他の人を压制したり破壊したりする者たちを援助したり、促進したりすることは常に備えてはならないことなのです。つまり、権威の地位について統治を始めた頃、キリストの真理を告白し始めたのに、突然、それを後退させて、キリストの身体である者達の残酷な迫害者に、また、すべての真の臣民たちの明らかな圧制者に、そしてすべての有害な者のうちの一人となった、彼のことを言っているのです。彼や彼の仲間や彼の最も近親者達であり今日、第一顧問である支援者達の恐るべき悪弊が続き、彼等の権力によって中傷したりすることを神はその裁きによって、まもなく、抑圧することでしょう。というのは、キリスト・イエスやジョージ・ウィシャルトや卑しい身分のアダム・ワランスという殉教者の血や、キリストのためにだけに苦しんだ他の人々の血だけでなく、世俗の罪の名のもとに、非常にも不正に流された血は、正当な復讐がそれを求められる者全てに注がれるまで、万軍の主の耳に 叫び続けることでしょう。しかし、それは

主として権威にあるあの彼に、彼が心から、そして、速やかに悔い改めて、神の裁きを防ぐ以外は、叫ばれ続けることでしょう。私は激しく判断したいと思います。しかし、あなたがたはあの時代を伴うすべての連合体から身を引くことを勧めましょう。というのは、私は神の御前で、神の聖徒たちの血が非常に尊く、世俗の権力は長く維持できず、また、血が流されることに喜んでいた者達は神に守られなかったことを見てきたので、私はそのことを語り、書いているのでありますから。そして、だから、再度言うのですが、彼等が悔い改めるしるしが見られるまで、彼らと親しくしないように勧めます。

今、私があなた方に、権威に合法的な服従を示すように勧めていることは、戦争が始まる 것을触れる前に書いたものに、矛盾するものではありません。というのは、合法的な服従と支配者を恐れてお世辞を言うこと、あるいは、コモンウェルスの破壊のために必要とし、企む彼等の望みを不正にも貫徹させるというものとの、それだけの差なのだからです。しかし、今は、このことは省いておきましょう。

主イエスの力ある御心により、あなた方の心に真に神を恐れることが支配し、あなた方の目を開け、あなた方の役目を考慮させ、そして、あなた方を強めてその役目を実行されますように。

アーメン。

1557年12月17日、ディエップより。

敬具

ジョン・ノックス John Knox

(一次史料)

John Knox, The Works of John Knox, ed. D. Laing, 6 vols, Edinbrugh. 1846-64
John Knox, John Knox's History of the Reformation in Scotland, ed. William Croft Dickinson, vol.1, Edinburgh, 1949
David Laing (ed.), Selected Writings of John Knox, Edinburgh, 1846, p.439-470

(参考文献)

飯島啓二『ノックスとスコットランド宗教改革』、日本キリスト教団出版局、1976年
伊勢田奈緒（訳）、ジョン・ノックスによる宗教改革文書（1）—1556年に神の御言葉の牧者であるジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリへ差し出した書簡と1558年著者によって補足説明された文書（1）—「環境と経営」第20巻1号（静岡産業大学）2014年6月, 119~126頁
伊勢田奈緒（訳）、ジョン・ノックスによる宗教改革文書（1）—1556年に神の御言葉の牧者であるジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリへ差し出した書簡と1558年著者によって補足説明された文書（2）—「環境と経営」第20巻2号（静岡産業大学）2014年12月
今井宏（編）『イギリス史』、山川出版社、1990年
久米あつみ（訳）『宗教改革著作集』第9巻、教文館、1984年
出村／丸山／飯島（共訳）『宗教改革著作集』第10巻、教文館、1993年
八代／中村（共訳）『宗教改革著作集』第12巻、教文館、1984年
八代崇『イングランド宗教改革史』聖公会出版、1993年
G. ドナルドソン『スコットランド絶対王政の展開』飯島啓二（訳）、未来社、1972年
Agnes Mure Mackenzie, The Scotland of Queen Mary, Edinburgh, 1957
Andrea Thomas, The Court of JamesV of Scotland, Edinburgh, 2005
Brown, P.H., John. Knox. I, Edinburgh, 1905
Brown, P.H., History of Scotland, vol.II, Cambridge, 1911

『静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部 紀要第14号』

- Gordon Donaldson, The Scottish Reformation, Cambridge, 1960
G. Barnett Smith, John Knox and the Scottish Reformation, London
Ian B. Cowan, Regional Aspects of the Scottish Reformation, London, 1978
Rosalind K. Marschall, Mary of Guise, Edinburgh, 2001
Rosalind K. Marschall, John Knox, Edinburgh, 2000
Pamela E. Rirchie, Mary of Guise in Scotland, East Lothian, 2002
Roger. A. Mason(ed.), John.
nox.and.the.British.Reformation,Aldershot,1998
Roger.Mason(ed.),John.Knox:On.Rebellion,Cambridge,1994